

## 「組織改革試論」

小 野 龍 彌

「組織改革」ときいただけで「あの問題か」とうなづかれる人も、クラブ内に数人はいると思うが、私の以前からの念願であるので、こゝに再び提議し多くの人々の批判を仰ぐ次才である。なお原稿も切も近づき、私の事情もあつて完成した論文にできないので、簡潔に、私の主題となるべき「合宿型態改革論」として述べたいと思う。

従来の合宿型態をふりかえつてみると、山岳・離島調査・カヌー・海外等それぞれ目標の異なつた部員が春期合宿を除いた全ての合宿にフルメンバーで参加していたが、考えてみればおかしいことである。カヌーを目的とする者が夏や冬の合宿に、重い登山靴をはきピツケルを握り、歯を喰いしばつてボツカ訓練や岩登りをやる……。

いずれの目標に向う者でも、その根底をなすものは「根性」や「体力」であるとはいえ、これでは経済的損失及び自分の目標に対する修練における時間的損失の大なることは、日を見るより明らかであることは、うなづいていただけよう。

例えばこうも考えられるではないか、カヌーをやりたい者が、登山靴やピツケルを買い、アルプスへつれてゆかれたばつかりに、かねてより欲しいゴムボートすら買えず、練習する時間もない……。

吾が部も創立4年を迎え、どの目標にしても、ますます行動に於いて質的に向上してゆかねばならないとき、それにブレーキをかける様な合宿型態は既に時代遅れと云えよう。

単に春期合宿だけを、それぞれの目標にのみ邁進するという現在の制度は春期計画が過去1年間の修練の發揮であるならば、質的向上の如何に遅々としたものであることか。

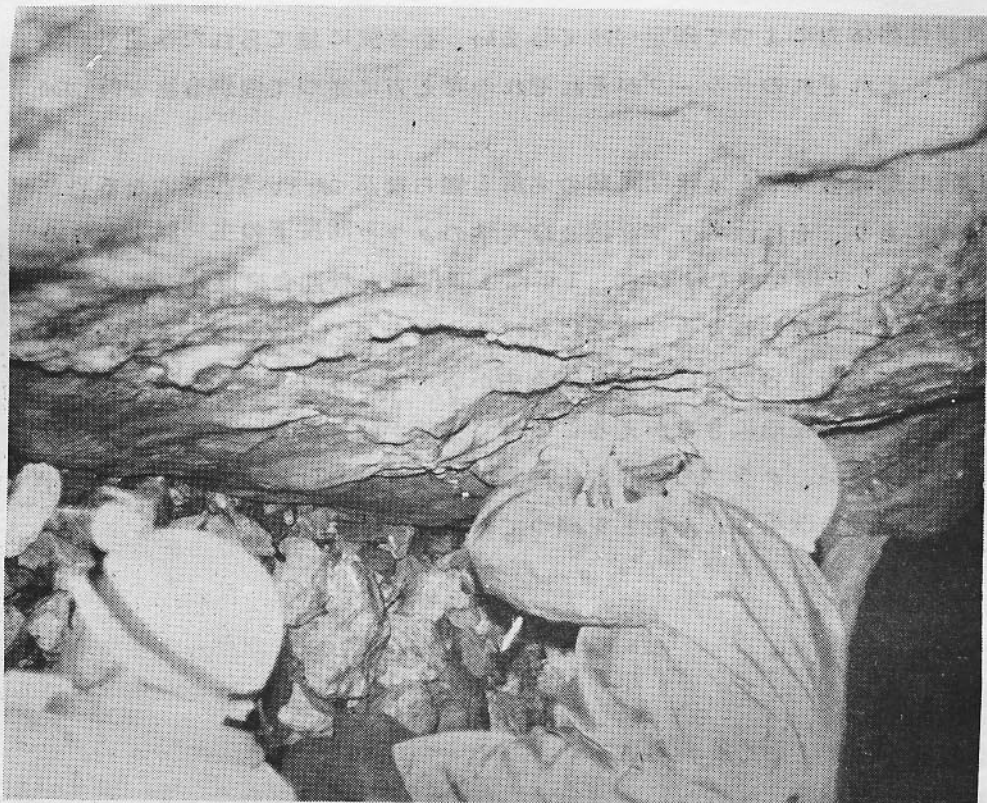
だから私はこう考える。先ず春期合宿を終えて、新人募集次に新人歓迎合宿を総合してやり、夏休み迄に新人の4年間進むべき目標を、新人個人の意

見及び性格体力によつて確定つけてしまい、新年度に建てられた春期計画に向つて、それぞれのグループがそれぞれの考え方に従つて個別合宿を持つのである。

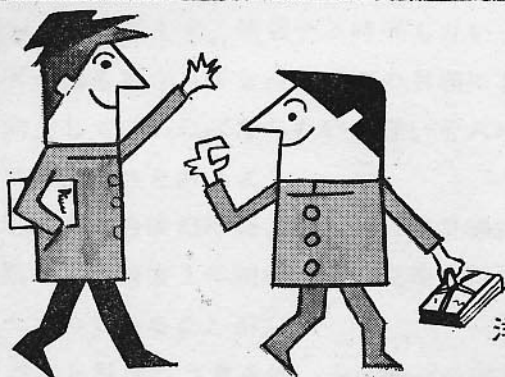
然し同じ部にあつても4年間同輩の名前も知らなかつたということになる恐れも充分にあり、それはクラブ意識及び大学のクラブ制度下の主将以下役員を選出の際にも支障をきたすので、1年に1度は新人歓迎合宿以外に総合的な（創立年度に行なわれた近江舞子に於ける）マラソン合宿の様なものをもつのである。（個別合宿の終つた夏休み中がいゝ、と思う）

新しい制度、型態にきりかえることは、現状が随性になつてしまつて難しいものであるが、クラブの質的向上の為にはなされなければならないと信ずる。合宿型態の改革されんことを願つてやまない。

・ 完



生物を調べている所、成果として一つ新種見つかる  
暗い内部にも生物は少なながら生存している。



じゃ！今夜  
キャノンで  
逢おうぜ！！

洋酒喫茶

**キャノン**

大阪・南・難波新地・松竹座ウラノウラ (211) 6312代